

アメリカ議会図書館 映画コレクション

Film Treasures from the Library of Congress

会場：長瀬記念ホール OZU / 会期：2019年10月31日(木) - 11月10日(日)

議会図書館映画コレクションに見る

アメリカ精神史の記録

大澤浄 玉田健太

Jo Osawa Kenta Tamada

長瀬記念ホール OZUでは、10月31日から「アメリカ議会図書館 映画コレクション」を開催する。これはアメリカ議会図書館が所蔵する14本(9プログラム)のアメリカ映画を、すべて35mmプリントで上映する企画である。ここでは、同館の映画コレクションおよび主要作品の見所などについて企画担当研究員が解説する(文中太字は今特集上映作品)。

当館と東京国際映画祭、モーション・ピクチャー・アソシエーション(MPA)、アメリカ議会図書館の共同主催による本上映会は、2014年のMoMA特集に始まる、アメリカのフィルムアーカイブ・コレクションの紹介企画第4弾である。書籍をはじめ地図・版画・楽譜・写真・レコードなど膨大で多岐にわたる資料を収集・所蔵するアメリカ議会図書館は、映画についても合衆国最大かつ最も

網羅的なコレクションを誇る。その根本には、同館がアメリカ文化の各領域における著作権登録管理業務を一手に引き受けているという制度的な支えがあり、あらゆるアメリカ映画は毎年同館に法定納入され、それが同館の映画コレクションの中核を占めている。筆者(大澤)は2015年と2017年に同館の国立視聴覚保存センター(National Audiovisual Conservation Center)を調査訪問する機会を得たが、その際に映画放送録音物部(Motion Picture, Broadcasting and Recorded Sound Division、以下MBRS)の映画収集部門の担当者が述べたのは、「アメリカの他の映画アーカイブが、それぞれに特徴的なコレクションを形成しているのと異なり、議会図書館の映画コレクションは、何でもあるがゆえに際立った特徴がない」ということだった。もちろんそ

れは、何でもあるという個性を持つことと同義で、初期映画のペーパー・プリント・コレクションは言うに及ばず、戦前の大量のワーナー・ブラザーズ作品を核とするAFIコレクションなど、議会図書館に固有の収蔵作品は無数に存在する。

議会図書館が主導する映画保存事業として重要なのが、国家映画登録(National Film Registry、以下NFR)である。この制度の成立の経緯については[岡島2016]に詳しいが、1989年の創設から2018年に至るまで毎年25本、計750本の「文化的、歴史的、美学的に重要な映画」が登録されている。NFR作品は、その完全かつ真正なバージョンを恒久的に保存することが要求され、またそれらが公衆の観覧に供されることにより、アメリカ国民の映画史および映画保存に対する意識を高め、結果として(白黒映画の着色や放送用のトリミングといった)改変されたバージョンの流通を抑止する効果を生んでいる。

今回の上映作品の選定は、当館と東京国際映画祭、議会図書館の担当者間の連携によってなされたが、そこで共有されていたのは、MBRSが近年復元した、あるいは新たにプリントを作った状態の良い作品を選びたいということ、そしてこれらNFR作品を上映したいということだった。その結果、4本のNFR作品[『裸の町』(1948年)『クール・ワールド』(1963年)『キング モンゴメリーからメンフィスまでの記録』(1970年)『パワーズ・オブ・テン』(1978年)]が選ばれた。中でも日本未公開の『キング モンゴメリーからメンフィスまでの記録』は、アメリカ合衆国に関心を持つあらゆる者にとって必見の長篇ドキュメンタリーである。キング牧師を記録したフィルムや音声テープを集めて時代順に再構成し、その半生を振り返った本作は、元TVプロデューサーで映画『質屋』(シドニー・ルメット監督、1965年)の製作などでも知られるイーリー・ランドーの発案による。公民権運動に参加していたわけではなかったランドーは、しかし、1968年のキングの暗殺に衝撃を受け、その生きた真実を後世に残すため、私財を投げうってドキュメンタリーを作り始める。映像と音声の記録は、全米各地やカナダの放送局、アーカイブ、ライブラリーのみならず、スウェーデンやインドからも、また

プロの製作によるものだけでなくアマチュアからも提供を受けた。例えば、キングが1955年にモンゴメリーのホール・ストリート教会で集団バスボイコットを呼びかけた時、まだ無名だった彼を撮影した報道陣はなかったため、本作に使用された音声は、たまたまその時テープレコーダーで録音していた個人から提供を受けたものだという[A Powerful New Movie]:176]。ナレーションを一切排し、歴史的フッテージのみで構成された(ただし、インターバルに著名俳優やミュージシャンが詩や散文を朗読する)本作は、黒人教会における牧師と会衆間の熱狂的なコール&レスポンスを基調とするキング牧師の圧倒的な演説を、その表情や身ぶりとともに生々しく現前させるだろう。本作は2012年に議会図書館とキノ・ローバー社によって復元された。

ミッド・センチュリーを代表するデザイナーとして知られるチャールズ&レイ・イームズ夫妻が、生涯で125本以上の短篇を撮り、そのどれもが真に独創的な映画であることは——日本では目黒区美術館の先駆的な紹介によって認識が高まってきているとはいえ——あまり知られていない。極大から極小の世界を正確かつ優雅に移行しながら見せる『パワーズ・オブ・テン』が典型的であるように、イームズ夫妻にとっては、映画は世界の仕組みを理解するための強力な道具であり、同時にその理解の仕方の美しい表現でもあった。議会図書館のイームズ・コレクションは、75万点に及ぶ写真資料が有名だが、映画フィルムも多数寄贈されており、現在、それらのデジタル化とニュープリント作製が同時進行している。今回選定した6本の短篇は、いずれも近年MBRSが新たに35mmプリントを作製した作品であり、その中には、コンピュータを人間の能力を支援し拡張するものとして正確に洞察した『情報機械』(1957年)と、スミソニアン協会の成り立ちと活動を劇仕立てで描いた『スミソニアン協会』(1965年)という2本の日本初上映作品も含まれている。いわゆる「映画館」で上映されることの少ないイームズ作品を大きなスクリーンで観る体験は、間違いなく素晴らしいものになるだろう。



(大澤浄/国立映画アーカイブ主任研究員)

今回は、ほかにも議会図書館が近年35mmプリントを作製した映画を上映する。その中でも特にキング・ヴィダーの『摩天楼』(1949年)は必見の作品である(以下では、本作について物語のクライマックスにも触れながら解説する)。本作は、『白昼の決闘』(1946年)や*Beyond the Forest* (1949年)などヴィダーが監督した、自らの欲望に突き動かされ、良識の外側に踏み越えてしまう人々を描く作品の一つと考えられる。本作の主人公で建築家のハワード・ローク(ゲーリー・クーパー)は、自らの設計に無断で変更が加えられたことを理由に、公営住宅を爆破してしまうのだ。だが、上記の作品と異なり、反道徳的・犯罪的行為に対して一切罰がない。これは、犯罪を割に合わないものとして描いてきたプロダクション・コード期の映画としても異例である。それどころか、摩天楼のてっぺんにロークが一人で仁王立ちするという強烈なラストを迎えるのであり、集団の論理に飲み込まれず、信念を貫く個人を称えるという以上の異様さを帯びている(その異様さは劇場の大スクリーンで文字通り見上げて観ることで倍増するはずだ)。

この異様さは、個人の才覚と個性による自助努力こそが世界を切り開いていくと考え、政府の介入を嫌うアメリカ個人主義の精神的支柱の一人で、本作の原作者であり脚本も担当したアイン・ランドに帰するところがある。1943年出版のベストセラーとなった原作『水源』*The Fountainhead*には、「大きな政府」が社会を支えるニューディール政策を批判するという意図がランドにはあった。[Waxman]。

だがヴィダー本人もインタビューで、本作を監督する数年前にユング派の精神分析を受け、ユングの著作を読んだことに影響され、ランドと同じように集団と個人の対立、個人の尊厳や神性に極めて意識的になっており、まさにうってつけの作品だったと語っている[Vidor:227]。ここで、ヴィダーのフィルモグラフィを俯瞰して考えてみると、『群集』(1928年)で、個人が群衆の一人にすぎない存在となっていく様を描き、1934年には共産主義的な共同体を描く『^{むぎのあき}麦秋』を自主製作・監督していたり、貧しい者の集合住宅を描く『街の風景』(1931年)を監督していたりした

が、40年代には反転するように、移民からのたたき上げの経営者を主人公にした*An American Romance* (1944年)を経て、貧しい者のための集合住宅であっても意に沿わない建築は爆破する『摩天楼』を作るに至った、ともいえるだろう。また、本作が第二次世界大戦後の住宅事情の逼迫で公営住宅が求められていた時代の映画であることを考えると、その爆破が表わす個人主義の強烈さが否が応でも増す。さらに、『摩天楼』の製作会社が、フランクリン・ルーズベルトへの期待もうかがわせる『飢ゆるアメリカ』(1933年)を製作し、ニューディール政策を支持していたワーナー・ブラザーズだということを考えれば、本作はアメリカの反ニューディールや反共主義の道程をたどるのに欠かせない作品であることが分かる。ちなみに、そのようなヴィダーはクーパーとともに40年代に非米活動委員会にすすんで協力し、赤狩りに一役買った映画人でもある。本特集では、赤狩りの犠牲となったハリウッド・テンの一人、アルバート・モルツ脚本による『裸の町』も上映する。奇しくもともにNYを舞台とした作品である。また、ほかにもマイケル・カーティス監督の『結婚スクラム』(1938年)、ジョン・フォード監督の『ウィリーが凱旋するとき』(1950年)など、日本での上映機会が稀な作品も上映する。議会図書館が近年作製した美しい35mmプリントで、ぜひご覧いただきたい。



(玉田健太/国立映画アーカイブ特定研究員)

参考文献

岡島尚志「白黒映画の“人工着色”(上) 1980年代後半のアメリカ——カラライゼーションの始まり」『NFCニューズレター』第127号(2016年6月-7月号)、2頁。

'A Powerful New Movie: KING-From Montgomery to Memphis,' *Ebony*, April 1970, pp. 173-182.

Vidor, King, interview by Nancy Dowd and David Shepard, *King Vidor* (Metuchen: Directors Guild of America and The Scarecrow Press, Inc., 1988)

Waxman, Olivia B., 'How Real History Shaped The Fountainhead and Kept Ayn Rand's Fans Coming Back,' May 7, 2018, <https://time.com/5264912/ayn-rand-legacy-fountainhead/>, Accessed September 6, 2019.